

ミハイル・カンディンスキー ピアノリサイタルと ロシアの鐘のお話

主催：津田塾大学同窓会千葉支部 津田塾大学同窓会助成事業

講話と演奏：ミハイル・カンディンスキーさん

日時：2023年10月7日（土）14：00～16：00 ※13:30 開場

場所：市川文化会館 小ホール [\(map\)](#) ※自由席

参加費：津田塾大同窓生・教職員 3,000円 / 津田塾大学生 無料
他大学・小中高その他学生 2,000円 / 一般 4,000円

このような時だからこそ益々、日本に居るロシア人ピアニストとして私は、ロシア文化を大切にしたい、祈りの気持ちを込めてロシア楽曲を弾いています。

Mikhail Kandinsky

千葉支部では昨年6月にZoom講演会でウクライナの現場の声を届けました。戦争が長引き世界が分断される中、ロシアの文化や音楽を通して、平和を願う気持ちを感じていただければ幸いです。



[お申し込みはこちら](#)

問い合わせ先：tsudaogchiba@gmail.com

プログラム

14:00～14:20 ロシアの鐘のお話

14:20～15:50 演奏

曲目

ベートーヴェン

ピアノソナタ第7番二長調 op.10-3

メトネル

おとぎ話 “鐘のうた” op.20-2

グリーグ

抒情小品集 op.54より

1. 羊飼いの少年
2. 農民の行進
3. トロルの行進
4. 夜想曲
5. スケルツォ
6. 鐘の音

ラフマニノフ

6つの音の絵 op.33

ベートーヴェンの明るい二長調ソナタとロシア音楽の共通点は、ロシア音楽に大切な「道のイメージ」が第1楽章に顕れ、道は人生の進路のよう。精神的エネルギーが感じられます。

メトネルとラフマニノフは親友で、お互いに尊敬しあいました。今回は鐘に因んだ『スカースカ』を。（おとぎ話や短編・小説の意）

そして今年はラフマニノフ生誕150年、グリーグの生誕180年でもあり、ノルウェーのグリーグの小品集を弾きます。短い中に広がる豊かなイメージは日本の俳句のようで、日本の方々にとっても良いと思いますがいかがでしょうか？

グリーグの書いた『鐘の音』は、ロシアの鐘よりシンプルで透明感があります。複数の和音が混ざる味わいはロシアと似ており、ぜひ聴き比べてください。

ラフマニノフの『音の絵』op.33-3は、神秘的な暗い吹雪のようです。私は雪がとても懐かしく、心暖かく感じ、毎春日本で桜を見ると、雪を思い出します。

Mikhail Kandinsky

終演後、千葉支部総会を行います。詳細は会員宛てに9月に別途お知らせします。

千葉支部は収益を特定非営利活動法人 国連UNHCR協会（国連難民高等弁務官事務所）に寄付いたしております。国や民族を指定せず、世界の難民のために役立てていただきます。

ロシアの自然

音楽は、それが生まれ出た母国の自然や風景と切り離すことはできません。

ロシアの自然は山がなく、殆どが一面の平野です。そこに人々の憧れる川が、森や平原を迂回してどこまでも流れてゆきます。それがロシア人の心の風景であり、ラフマニノフの広い呼吸のメロディ、大地のように広い和音は、ここから表れ出ています。



聖ユーティミウス救世主修道院

ロシアの鐘

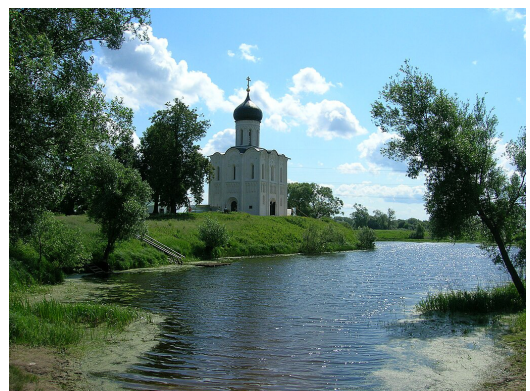
もう一つ、ロシア音楽の生命として大切な特徴は鐘です。鐘は人の様にさえ思われてきました。昔ながらの鐘の音が、ロシア音楽芸術の源です。

鐘の役割は様々なものがあり、例えば祭りや喜びの鐘の音、結婚の鐘の音（今回弾くラフマニノフの『音の絵』 op.33-4の様に）、または悲劇的な鐘の音、吊いの鐘の音、そして警鐘を鳴らす鐘の音（今回弾くメトネルの『おとぎ話』 op.20-2の様に）。警鐘を鳴らすのは、火事などは勿論、タタールや隣国の兵隊が入って来た時などもそうで、今回メトネルの曲で鐘が危険や恐れを告げ、人々の集まる様子も感じられます。

ロシア正教の鐘と歌

教会の隣に立つ高い鐘楼で、特別技術をもつ者が一人で大小複数の鐘を長くも短くも操り鳴らします。祈祷の開始や祈祷中の大切な時に鳴らし、神聖な精神を垂れ広めた鐘の音。正教会の典礼では、器楽は使われず、人声の歌のみで、そこに唯一あるのが鐘でした。声楽曲もラフマニノフの傑作『晩祷』 op.37を筆頭に、鐘の響きの影響は甚大です。

そして鐘と歌は、ピアノやどの器楽曲にも、ある時ははっきりと、ある時は気づかないくらい細部まで、浸透しました。街の教会によりそれぞれ独自の音色やメロディ、リズムをもった鐘が、今日も鳴っています。



POKROVA-NA-NERLI
ポクロヴァ・ナ・ネルリ教会

[お申し込みはこちら](#)

問い合わせ先：tsudaogchiba@gmail.com